

西南学院と宣教師

— 私が接した宣教師の方がた —

村上 隆太

はじめに

西南学院は、その創立以来多くの宣教師に支えられてきた。そもそも創立者C.K. ドージャー先生はアメリカ南部バプテスト連盟から派遣された宣教師であった。西南学院の歴史は、宣教師の働きを抜きにして語ることはできない。

ドージャー記念館の西側に、これまで西南学院で教鞭を取られた79名の宣教師の名前の一覧が石碑に刻まれている。その中には私が知らない方々も多数おられるが、私が西南学院中学校、高等学校、大学（以下、西南中、西南高、西南大と略）で教わった宣教師の先生方、また、私が西南に就職して接することになった宣教師の方がたの数は50名を超える。考えてみると、私が後に英語を自分の研究テーマとして学び、また教えることになった背景にはこれらの宣教師の先生方に英語を習ったことが非常に大きい。西南学院の特徴である「キリスト教学校」と「英語の西南」は宣教師の働きに負うところが誠に大きい。





宣教師との思い出を語る村上先生
(写真協力：西南学院高等学校同窓会「輝西会」)

1. 中学・高校時代

私は、福岡市西新の防塁前に生まれ、西南学院のキャンパスで育った。当時、父、寅次が西南中の教員であったので、小学校時代から学院の職員住宅に住み、そこから西新小学校に通った。そして西南中に進学した。学院の職員の子弟は、授業料減免の恩恵が与えられていたし、何よりも教室まで一分の通学は楽であった。

西南中はその時代も名門校であった。私が一般の入学試験を受けて何とか入学できたのを一番喜んだのは父であった。西南中の先生方は教育熱心で、授業にも熱がこ



(注)  は、(新制)中学校施設
 は、(旧制)中学部施設

旧制西南学院中学部施設配置図 1946(昭和23)年現在

もっていたし、教頭であった父のところにたびたび先生方が集まって教育談義をしていた。英語の授業も、宣教師の先生が通訳なしでされていて、1年生は初めて接する生の英語に戸惑って、お互いに「何ば言いござーとや」と私語を始めると、トッド先生(P. Todd)は「シャラップ、シャラップ(“Shut up! Shut up!”)」と大声で叱られた。私たちは、そのようにして英語を覚えた。トッド先生もグラス先生(L. C. Glass)も本来は中国派遣の宣教師だったが中国本土の共産化で宣教師が入国できなくなり、日本に来ることになったと聞いたことがある。

高校時代のいつだったか、グラス先生を囲んで高校の先生方と宗教部ゲッセマネ会の生徒たちの懇談会があったが、グラス先生のお話を誰が通訳するかということになった。豊



P. Todd



L. C. Glass

田佳日子先生が「村上、お前やってみろ」と振られ、グラス先生は一瞬大丈夫かなという表情をされたが、やがてゆっくり易しい英語で話し始められたので、私は特に問題なく通訳できた。これは自信になった。西南中・西南高で宣教師の先生から習った多くの生徒は、その程度の英語を身に着けていたと思われる。学校での授業の他に、宣教師の先生の奥様も高校生対象に日曜日にバイブルクラスを開いておられ、私は毎週、ギャロット夫人 (D. C. Garrott) のクラスに出席していたので、他の生徒よりも英語を聞き、話す機会が多かったのかも知れない。

2. 大学時代

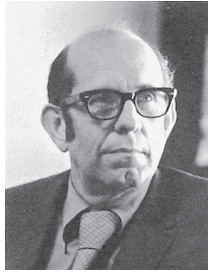
西南高を卒業するに際し、どこかの大学で何を勉強するかを決めなければならなかったが、大した受験勉強もしていなかった私は、西洋史も視野にあったが、結局、英語を勉強しようと考えた。目の前に西南学院大学文学部英文学科があったからである。幸いにも、入学試験には合格し、そこで英語学 (特に英語史) を学ぼうと決めた。またしても、教員子弟の授業料減免措置があったことも影響している。

西南大英文学科では、1年次から宣教師の先生の授業があり、グレーヴス先生 (A. Graves) の授業で John Bunyan の *The Pilgrim's Progress* を習った。グレーヴス先生は授業でもキャンパスでも学生には全く日本語で話されなかった (先生は、本当は日本語が堪能で、地域のご婦人方とは日本語で話されていたと後に聞いた)。2年次以降もキャラウェイ先生 (T. N. Callaway)、ホートン先生 (F. M. Horton)、シェパード先生 (J. W. Shepard) の授業を受けたが、英文科だから当然かも知れないが、皆さん英語で授業をされた。キャラウェイ先生は日本文化、特に仏教にも強い関心をもっておられて、アメリカ文学史の授業なのに、なぜか或る時教卓に頭蓋骨を持ってこられたのには度肝を抜かれた (本物では無かったかもしれないが…)。私は日曜日にはフィルダー先生 (L. G. Fielder) のバイブルクラスに出席していたが、フィルダー先生も学生には殆ど日本語を話されず、しかも早口の英語でついていくのがやっとなかった。ホートン先生には「劇」(ドラマ) の授業を習ったが、その実際の訓練ということで希望者に英語劇を指導され、声の出し方、舞台での所作を自ら示して教えられ、大変勉強になった。先生は元俳優志願で、指導は本格的であった。私は裏方のお手伝いもして、大道具、小道具の作り方まで習った。先生はこの劇のグループを率いて地方の教会に出張公演をされ、私たちは先生の大型シボレー (通称ホートンバス) に乗って移動した。先生はギターも弾かれる器用な方で、授業以外のことを随分教えていただいた。

宣教師の先生方はバイブルクラスのメンバーなど親しい学生たちを自宅に招いて



A. Graves



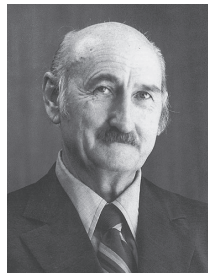
J. W. Shepard



L. G. Fielder



W. M. Garrott



E. L. Copeland

ワンプレートの食事を提供されたが、1960年代の日本はまだ貧しく、私たちにはご馳走で、何よりもその折に宣教師のお宅に行っておアメリカ人の家庭の様子を垣間見ることができたのは刺激的であった。当時、日本の経済・生活水準は1ドル360円の時代であった。このころギャロット先生 (W. M. Garrott)、コーブランド先生 (E. L. Copeland) が学長、院長をしておられた。ギャロット先生の日本語は完璧で、黒板には左手で日本語を書いておられた。先生はフルート、奥様はピアノをされ、折に触れて演奏を聴かせていただいたが、お上手だった。

大学卒業後、直ちに大学院に進学するか、就職するか迷っていた折に、東京の目白ヶ丘教会で宣教師が通訳を求めているとの情報があり、将来役に立つかもしれないという気持ちで、引き受けた。スミス宣教師 (L. E. Smith) の通訳・秘書として、1年半働いたが、進学の気持ちが強く、しばらく受験勉強をして九州大学大学院文学研究科英文学専攻に入学した。そこで中世英語の研究を始め、2年後に修士号を得た。西南大とは全く違った研究主体の学校の雰囲気を初めて味わって、研究とはこういうものかと改めて知った。九大英文学科にはイギリス人教師がいて、アメリカ人宣教師の南部アメリカ英語以外を知らなかった私は、最初分からなくて困った。

3. 西南大就職後

九大修士課程修了後、西南大で英語の教員を求めているとの情報を得て、応募した。急に前任の英語学の先生が異動されたためであった。まさか母校で教えることになるとは思ってもいなかったが、有り難く承諾した。

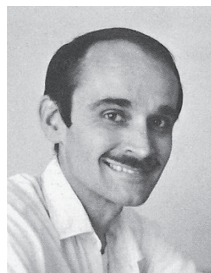
1965年より文学部外国語学科英語専攻で英語、英語史、音声学などを教えることになった。旧知のグレーヴス先生、ホートン先生とは今度は同僚として接することになったが、他に、初めて接する方がたもおられた。シェパード先生とは時折テニスをした。奥様はオルガンを弾かれる方で、ランキン・チャペルにパイプオルガンが導入されたのは奥様の影響だったのでないかと想像する。(西南学院バプテスト教会のパイプオルガンの導入も奥様の指導があったのではないかと推測する。)

コールマン先生 (W. A. Coleman)、ジョンソン先生 (H. C. Johnson) は以前のように英語で講義やゼミをしておられたが、会議でも英語で応答しておられたので、教授会は日本語と英語が混じり合う面白い状況であった。フランス語学科ではヤング先生 (H. H. Young) がフランス語で授業をされていた。自宅では英語、学校ではフランス語と日本語とポリグロット (polyglot: 多言語の生活) をしておられたが、有能な先生だった。国際文化学科には屋宜先生 (D. K. Yagi) がおられたが、この先生は卓球が上手で、大学入試の採点時の昼休みなどに教員が体育館で卓球をしたりしていたが、誰も彼には勝てなかった。(卓球部部长もしておられた。) 国際文化学科にはチェロを弾かれるオーウェン先生 (E. W. Owen) もおられた。その後、ジョンソン先生 (D. A. Johnson) やシャフナー先生 (K. J. Schaffner) も加わられた。

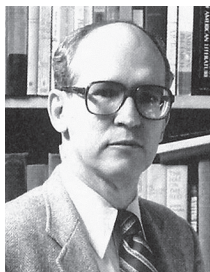
神学部はまだ干預校地にあったが、先生がたはキリスト教学を担当されていたこともあり、また大学全体の教授会が本部で行われていたこともあって、しばしばキャンパスでお会



F. M. Horton



H. H. Young



H. C. Johnson



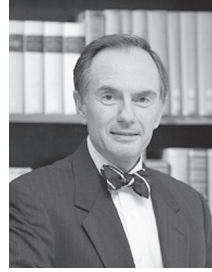
D. K. Yagi



C. L. Whaley



L. K. Seat



G. W. Barkley

いていた。ホエリー先生（C. L. Whaley）は院長を兼任され、その後、シート先生（L. K. Seat）、パークレー先生（G. W. Barkley）も私の次の学長（後、院長）をされることになった。

4. 宣教師その後

2002年ころ、アメリカ南部バプテスト連盟は西南学院に宣教師を派遣することをやめた。その背景には南部バプテストの保守化があり、宣教師はこの傾向に反対の意見を表示していたと聞いた。当時学長をしていた私はこの情報をそれ以前に把握していたので、その対応を考えていた。そこで宣教師教員の意向を聞き、また彼らが所属する学部意向も聞いて、彼らが希望するならば各学部が宣教師を専任教員として受け入れる方向で検討することとした。結果的には双方とも大学に専任教員として残ることに賛成であった。そこで大学として全宣教師を大学の専任教員（宗教主事は宗教主事）として採用し、これまでと同様に教育と学校運営に参加する手続きを取った。

創立以来100年間にわたる教育とキリスト教活動ならびに学校運営に当たってこられた宣教師の働きと南部バプテスト連盟への感謝とともに宣教師は大学専任教員として残ることになったのである。

この原稿は、2015年10月24日に西南学院大学博物館で行われた西南学院高校同窓会「輝西会」でのシンポジウムをもとにして紀要に掲載するために改めて執筆を依頼したものである。

西南学院奉職の宣教師

No.	氏名	西南学院における 宣教師の在職期間
1	Mills, Ernest Oscar	1910—16
2	Mills, Grace Hughes	1913—16
3	Ray, Jefferson Franklin	1916—19
4	Rowe, John Hansford	1916—21
5	Walne, Ernest Nathan	1916—34
6	Dozier, Charles Kelsey	1916—29
7	Dozier, Maude Burke	1916—30
8	Chiles, Carrie Hooker	1917—19
9	Schell, Naomi Elizabeth	1917—22
10	Williamson, Norman Francis	1918—36
11	Fulghum, Sarah Frances	1919—26
12	Bouldin, George Washington	1919—32
13	Treadwell, Mose Allen	1921—22
14	Nix, Willard Voniver	1921—24
15	Chapman, John Griffin	1921—26
16	Chapman, Vecie Patience King	1921—26
17	Smith, Roscoe Conklin	1921—26
18	Conrad, Florence	1921—29
19	Baker, Effie Evelene	1921—32
20	Cunningham, Collis	1922—26
21	Bouldin, Margaret Alice Lee	1928—32
22	Watkins, Elizabeth Taylor	1929—41
23	Dozier, Edwin Burke	1933—69
24	Garrott, William Maxfield	1936—74
25	Graves, Alma O'Norean	1938—40
		1947—76
26	Moorhead, Marion Francis	1948—52
27	Callaway, Tucker Noyes	1947—71
28	Copeland, Edwin Luther	1949—56
		1976—80
29	Hays, George Howard	1949—75
30	Hays, Helen Mathis	1950—75
31	Glass, Lois Corneille	1950—55
32	Todd, Pearl	1950—55
33	Clarke, Coleman Daniel	1950—66
34	Gillespie, Alfred Leigh	1950—69
35	Wood, James Edward Jr.	1951—69
36	Wood, Alma Leacy McKenzie	1951—69
37	Shepard, Jean Evelyn Prince	1951—77
38	Shepard, John Watson Jr.	1951—83
39	Campbell, Vera Leona	1952—80

No.	氏名	西南学院における 宣教師の在職期間
40	Callaway, Elizabeth Clark	1953—71
41	Knox, Martha Elizabeth	1953—72
42	Culpepper, Robert Harrell	1953—80
43	Fielder, Lennox Gerald	1956—78
44	Horton, Frederick Mast	1956—83
45	Owen, Evelyn Wood	1958—69
46	Clark, Gene Austin	1959—65
47	Farthing, Earl Davis	1960—66
48	Dozier, Mary Ellen Wiley	1960—76
49	McMillan, Virgil Oliver Jr.	1961—63
50	Fenner, Charlie Worden	1961—80
51	Sanderson, Rennie Vee	1963—69
52	Southerland, Lawrence Monroe Jr.	1963—72
53	Nations, Archie Lee	1964—67
54	Culpepper, Kathleen Sanderson	1964—77
55	Horton, Elvee Wasson	1964—77
56	Coleman, Wilma Anita	1964—00
57	Seat, Leroy Kay	1968—04
58	Seat, Pauline June Tinsley	1966—04
59	Garrott, Dorothy Carver	1969—77
60	Young, Hugh Howland	1971—97
61	Yagi, Dickson Kazuo	1972—98
62	Hollaway, Ralph William	1975—76
63	Moffett, Elzie Sherwood Jr.	1979—84
64	Parker, Franklin Calvin	1980—90
65	Whaley, Charles Lloyd Jr.	1983—92
66	Whaley, Lois Linnenkohl	1983—87
67	Darley, Jack Wayne	1983—03
68	Johnson, Hershel Conrad	1983—04
69	Barkley, Gary Wayne	1987—02
70	Schaffner, Karen June	1987—03
71	Johnson, David Allen	1989—03
72	Young, Norma Lucas	1992—94
73	Johnson, Robin Elliott Parks	1998—03
74	Hankins, Lydia Barrow	1998—03
75	Hankins, Jerry Ronald	1999—03
76	Moorhead, Thelma Chandler	1950—53
77	Hollaway, Linda Frances Louton	1958—61
78	Bradshaw, Melvin Jeol	1966—71
79	Copeland, Louise Tadlock	1977—79